

松岡佑子さん講演会

「ハリー・ポッターと私―魔法界とマグル界のコミュニケーション―」

■名古屋市立大学大学院人間文化研究科・欧米の文化主催
■六月五日（木）名古屋市立大学教養棟四〇四号室に於いて開催

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 松本 佐保

J・K・ローリング著『ハリー・ポッター』は世界的なベストセラーとなって社会現象を引き起こし、九歳〜一〇歳の幅広い読者層を持っており、児童文学やファンタジー小説という分野にとどまらないことから、イギリスを代表する文学・文化現象であると言える。しかしこの英語で書かれたベストセラー作品が日本で広く受け入れられるには、松岡祐子氏の「読者を引き付ける日本語」への翻訳なくしては実現しえなかった。日本における『ハリー・ポッター』の位置づけは、本嫌いだった小学生が初めて最後まで完読、気付いたら一気に読み切っていた本であり、これをきっかけに本が好きになった、また場合によっては勉強が好きになったという、偉大なるヤングアダルト向けの本なのである。本校の大学院生や大学生に

とつてもやはり、小学校高学年、中学時代に夢中になって読んだ本であり、それは文系や理系を問わないことから、人間文化研究科主催ではあったものの、人文社会学部以外に経済学部、薬学部、看護学部、医学部、芸術工学部のほぼ全学部からの学生が参加し、さらに市民に対しても人数を限定して、この松岡氏の講演会を公開とした。そのためオーガナイズにあたって色んな困難や不備も生じたが、手伝って下さった学生や先生方、事務のスタッフ、特に広報の方に助けられて、大雨の天候であったにもかかわらず会場は満席、質疑応答も含めて大変な熱気に包まれた。松岡祐子氏の講演内容の概要は以下の通りである。彼女がどの様にして原作の『ハリー・ポッター』に出合い、その翻訳権をどの様にして獲得し、そして翻訳をする過

程でいかに行間や文化も訳し、異文化を訳し、美しい日本語にしていった過程を熱く語っていた。まず原作との出会いであるが、日本語版の挿し絵画家となる旧知のダン・シュレンジャー氏（写真右が彼の作品）ご夫妻から作品の存在を知らされた。それは松岡祐子氏がちょうど、出版社静山社と共に創立し敬愛していたご主人松岡幸雄氏を亡くされ、悲しみにくれていた矢先の出来事であった。すぐに本書の魅力と素晴らしさに気付いた祐子氏は、原作者J・K・ローリング氏の代理人に連絡を取り、日本の大手出版社がすでに翻訳権獲得に動いていたにもかかわらず、熱心に交渉を続けて彼女の間力によって翻訳権を入手した。それは『超』小出版社が世界的な『超』人気本を出版することになった」と表現され

ている。これはまるで魔法にかかった様な出来事で、さらにこの翻訳書を出す過程の翻訳、編集、書店、マスコミ関係者など彼女を支援してくれる人が次々と現れ、これも次なる魔法であった。マグル界とは人間界のことと、ハリー・ポッターの物語に魔法界とこのマグル界が登場、その国境がセント・パンクラス駅（写真中）九と三／四番線にあり、この二つの世界のコミュニケーションがあつてこそ、日本語版の『ハリー・ポッター』の出版とその成功があつたのだと彼女は語る。

松岡氏は国際基督教大学（ICU）を卒業した後、国際労働機関の年次総会の同時通訳者を務めるなど、国際的な場の第一線で同時通訳（通常の通訳より特別なスキルが必要）として活躍し、また米国のモントレイ国際大学大学院で通訳・翻訳の客員教授として招聘されるなど華々しい経歴を持っている。しかし『ハリー・ポッター』の翻訳には名翻訳家のご友人の助言をはじめ、色んな方たちの助けと、ご自身の努力と熱意なくしては実現しえなかったのである。名翻訳者のご友人との頻繁なやり取りで「誤訳潰し」をしてもいい、そして例えば一人称である

英語の「I（アイ）」を性別、年齢、さらにその人物の特徴によって異なる日本語に訳したエピソードが披露された。日本語の一人称は「わたし」「わたくし」「僕」「俺」「わたしや」「わし」「せっしや」と、もっともつと沢山の選択肢があり、その中からその人物の特徴を一〇〇％理解した上で、例えば年配女性なら「わたしや」で年配男性なら「わし」で、ハリーは当然ティーンエイジャの男の子なので「ぼく」となる。さらにより意地悪な人物なら違う一人称を使うなどなど、そこまでの行間と、日本とイギリスの間の異文化を完全に理解した上でしか訳すことが出来ない配慮がされているのである。こうしたまさに日本とイギリスの間の異文化理解と、マグル会と魔法界のコミュニケーションの講演会の内容は、多くの学生を含む聴衆達に大いに刺激を与えた。特に松岡氏の翻訳の苦労話と裏話については、多くの質問が出され、これに対しての詳細な回答など、活発な質疑応答が行われた。

最後に彼女が言った「骨格となる日本語が大事。日本語でたくさん本を読んでもほしい」というメッセージは学部を問わず本大学と大学院の学生、そして市民の皆

さんに対して、読書離れが言われる時代にあつては、大きなインパクトとなって響いたのではないだろうか。松岡氏は出版社静山社の社長、そして会長となり、現在でもその最高経営者としても活躍しており、二〇〇〇年には日経ウーマン・オブ・イヤー賞を受賞した。そんなビジネス・ウーマンとしての成功者でもあることから、学生たちのキャリア教育のヒントにもなったのではないだろうか。

講演会翌日『日本経済新聞』朝刊の三面の「窓」という欄に前日の松岡祐子氏の講演会の様子が取材されて記事となり「名古屋市立大学で五日『ハリー・ポッター』シリーズの日本語版翻訳者、松岡祐子さんの講演会が開かれ学生や市民ら約二五〇人が熱心に聞き入った」と掲載された（『日本経済新聞』朝刊二〇一四年六月六日金曜日）。

この大盛況であつた松岡祐子氏の講演会のフォローアップ講座として、同年一〇月一八日に「ハリー・ポッター物語の歴史的背景―イギリスのお城と寄宿学校にみる階級制度―」という題目で、松本佐保が人間文化研究科の市民公開講座を行い、多数の市民の方に

お越しいただいたので、内容を簡単に紹介しておきたい。

・ハリー・ポッター物語の歴史的背景について講義を行った。ハリー・ポッターの物語はフィクションであるが、イギリスを舞台に歴史的な背景を多く踏まえている。ファンタジー小説でもありそのファンタジーとは何であるかなどの講義を行った。

・USJのアトラクションとしても話題を呼んでいるホグワーツ魔法魔術学校は、イングランド北東部ノーザンバーランドのアニック城（写真左・著者撮影）をモデルにしており、映画『ハリー・ポッターと賢者の石』の撮影にも使用された。こうした映画の撮影現場に使用されたお城や教会などの歴史ある建物も紹介した。そしてお城の住人である貴族の存在や、ホグワーツ魔法魔術学校のモデルとなったパブリック・スクールはエリート育成の寄宿学校ということからイギリス特有の階級制度を垣間見る題材として説明した。また本物語に見ることが出来る人種問題などについても言及した。

